

山に向かって 目を上げる

詩篇121篇



都上りの歌

「都上りの歌」(120～134篇)

都(天の都)へ向けた巡礼の旅の出発点は、最初の詩篇120篇1節にある「**苦しみのうち**」から、あるいは、130篇1節にある「**深い淵**」からの出発である。

苦しみのうちに、私が主に呼ばわると、主は私に答えられた。(詩篇120:1)

主よ。深い淵から、私はあなたを呼び求めます。(詩篇130:1)

わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。

(エレミヤ33:3)

クリスチャンが人生で見上げる7つの山

- ① シナイ山「神とともに生きる山」
- ② タボル山「山上の垂訓が語られた山」
- ③ モリヤの山「試みの山」
- ④ ヘルモン山「油注ぎの山」「変貌の山」
- ⑤ カルバリ山「自分の十字架を背負う山」
- ⑥ ネボ山「希望の高みへと上る山」
- ⑦ シオン山「いのちの言葉の山」

① シナイ山「神とともに生きる山」

それで主は、あなたを苦しめ、飢えさせて、あなたも知らず、あなたの先祖たちも知らなかったマナを食べさせられた。それは、人はパンだけで生きるのではない、人は主の口から出るすべてのもので生きる、ということを、あなたにわからせるためであった。

(申命8:3)

イスラエルの民はモーセに導かれ、神の民としての掟(十戒)を**ホレブ**の地にある**シナイ山**で受け取り、約束の地へと向かう。

「**荒野の時代**」は、神さまとのハネムーンのような時代。

※**ホレブ**：「非常に乾いた荒地」という意味

② タボル山「山上の垂訓が語られた」

山上の垂訓の本質は、メシアによるモーセの律法の解き明かしであり、メシアによる「神の国に入るための義」の解説である。

イエスをメシアとして受け入れた者は、その義を手に入れたのであり、イエスは八つの「幸いです」という宣言によって、「神の義」を手に入れた人たちの特徴を上げている。神は私たちの外面ではなく、内面を見ておられる。神に喜ばれる生き方。

121:1 私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。

121:2 私の助けは、天地を造られた主から来る。

121:3 主はあなたの足をよろけさせず、あなたを守る方は、まどろむこともない。

121:4 見よ。イスラエルを守る方は、まどろむこともなく、眠ることもない。

121:5 主は、あなたを守る方。主は、あなたの右の手をおおう陰。

121:6 昼も、日が、あなたを打つことがなく、夜も、月が、あなたを打つことはない。

121:7 主は、すべてのわざわいから、あなたを守り、あなたのいのちを守られる。

121:8 主は、あなたを、行くにも帰るにも、今よりとこしえまでも守られる。

クリスチャンが人生で見上げる7つの山

③ モリヤの山「試みの山」

そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。 **(ローマ12:1)**

この山は、創世記の22章に書かれている、アブラハムがひとり子イサクを神への生贄としてささげようとした山であり、神さまへの従順のテストの時。

献身とは、「自分自身が神に従う決心を明らかにする事」でクリスチャンに決断を迫られる時が来る。本気で従うことができるなら幸いである。

④ ヘルモン山「油注ぎの山」「変貌の山」

見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんとというしあわせ、なんとという楽しさであろう。それは頭の上にそそがれたとうとい油のようだ。 **(詩篇133:1-2)**

神のご用の為に神専用の器として用いられる事。神の御用に用いられる事ほどすばらしい事はない。人生の目的を果たすことであり、油注ぎが伴う。

⑤ カルバリ山「自分の十字架を背負う山」

彼らはイエスを受け取った。そして、イエスはご自分で十字架を負って、「どくろの地」という場所（ヘブル語でゴルゴタと言われる）に出て行かれた。 **(マタイ19:17)**

それから、イエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。 **(マタイ16:24)**

自分の十字架を負うとは、「この世に於ける思いを捨て、自分が負うべき使命に生きること。」

⑥ ネボ山「希望の高みへと上る山」

約束された方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白しようではありませんか。 **(ヘブル10:23)**

この山は、ネボ山です。これは「希望の山」です。「ネボ」とは「高い」という意味であり、申命記34章で、神がモーセの死の直前に、その山の頂上に立たせ、これより向かう約束の地全体を見せた山である。

120才という高齢にもかかわらずモーセの目も気力も衰えなかったとあり、モーセはしっかりとその地方全体を見渡す事が出来た。

この時、モーセは約束の地には入る事が出来なかったが、心は更なる高みへと上っていくようだったであろう。生涯をかけて神の御心を成し遂げ、後は神のもとへと旅立つ。これこそ正に神の前に歩むクリスチャンの姿である。

その心は希望に溢れていたと思う。全ての望みは神にある。神様は真実なお方、私達も希望を告白し、このネボ山を見上げて進もう！

⑦ シオン山「いのちの言葉の山」

終わりの日に、主の家の山は、山々の頂に堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち、すべての国々がそこに流れて来る。多くの民が来て言う。「さあ、主の山、ヤコブの神の家に上ろう。主はご自分の道を、私たちに教えてくださる。私たちはその小道を歩もう。」それは、シオンからみおしえが出、エルサレムから主のことばが出るからだ。 **(イザヤ2:2-3)**

この山は、神の都、エルサレムの中心にある「シオンの山」である。終わりの日に全ての国民が主の道を求め、このシオンの山を目指して上ってくる。

人々の方からシオンの山に福音を間きに訪れるのである。世の終わりが近づいてきているかもしれない。しかし「いつも共にいて下さる」と約束しておられる主のお言葉を忘れずに、主を見上げて、ご一緒に歩いていきたい。